

■村橋久成 技術官僚。密航留学生になるもなじめず帰国。開拓使に勤めてビール始めるも、突然辞職し音信不通、行倒れに。

むらはしひさなり

天保改革弾圧1842＝ 薩摩藩加治木島津家の分家村橋久柄の長男に生まれる。

阿部正弘首座1845＝ 3歳：

・・・・・・1848＝ 6歳：この年、琉球着任を命じられた父をのせた船が遭難し、行方不明となったため、家督を相続。

尊徳報徳論・1851＝ 9歳：

ペリー来航・1853＝11歳：

桜田門外変・1860＝18歳：

禁門の変・1864＝22歳：この年、薩摩藩庁において英国留学生派遣を決定。

薩摩藩士密航1865＝23歳：英国留学への藩命が下り、密出国のため変名(橋直輔)を使用、一行の中で際立って身分の高い武士として、串木野羽島から、グラバー商会のオーストライエン号に乗船し、香港・シンガポール・スエズを経て、英国サザンプトンから、ロンドンに入り、専攻科目を陸軍学術に変更して、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの法文学部に入學するが、カルチャー・ショックからふさぎ込み、続行が危険な状態となり、

薩長同盟・1866＝24歳：松木弘安とともに、帰国の途につき、陸奥宗光と乗り合わせ、鹿児島に到着。

明治維新・1868＝26歳：この年、家督を譲ってあった弟が長岡戦に出軍し、戦死。加治木大砲隊監軍として、東北に出征。

戊辰戦争終・1869＝27歳：この年、嫡子が夭折。箱館に出兵し、旧幕軍征討青森口鎮撫総督府軍監となる。箱館市街を制圧し、箱館病院院長高松凌雲を通じて榎本武揚に恭順を勧告。五稜郭落ち、旧幕府軍降伏後、榎本らの恭順に立ち合う。蝦夷地平定。軍監を免ぜられ、鹿児島帰着。賊軍追討の戦功により金400両の賞典を下賜される。

薩摩置県・1871＝29歳：没落した旧門閥の悲哀のなか、設置されてまもない黒田清隆率いる開拓使に採用され、東京出張所在勤。

学問のすすめ1872＝30歳：開拓権大主典となり、東京三官團担当。開拓使のなかでも、旧身分は際立って高く、孤独状態。

明治6年政変 1873＝31歳：開拓大主典となり、農業課を担当、箱館の七重村官園(のち七重開墾場、七重勸業試験場と改称)に在勤。

佐賀の乱・1874＝32歳：札幌殖民地(屯田兵村地)取調べを命ぜられ、七重開墾場300万坪の全地測量と畑地の区画を終了後、屯田兵の入殖地を琴似村に決定し、200戸を整備。続いて、室蘭殖民地(屯田兵村地)取調べ。

初の民間工場1875＝33歳：この年、次男が誕生。東京出張所農業課在勤となる。勸農機構の改正を求める稟議書「勸農着手順序ノ義」を提出。北海道物産縦覧所事務管理を命ぜられると、ドイツ帰りの麦酒醸造人中川清兵衛を雇用し、東京青山に決定していた麦酒醸造所を覆す北海道建設稟議書を提出。麦酒醸造入用品が横浜到着。

三つの内乱・1876＝34歳：この年、鹿児島祖母が死去。麦酒醸造所北海道建設を促す稟議書を再提出して、裁可され、麦酒醸造所・葡萄酒醸造所・札幌製糸所建設三所建設のため、牧畜技師エドウィン＝ダン・招募清国人・工部省赤羽製作所職工ら30名を同行し、札幌入り、次々と建設落成し、麦酒醸造に着手後、帰京。

西南戦争・1877＝35歳：職官改正で開拓権少書記官となる。麦酒と葡萄酒を箱崎官用地船着場に初荷揚げ、借用した中川の氷室へ搬入。皇太后その他大官諸侯公に献上するとともに、読売新聞に札幌製麦酒の広告を掲載。札幌在勤を命ぜられる東京・箱崎官用地内に北海道物産売捌所ならびに麦酒蔵建築を再稟議して、裁可される。正七位。

大久保暗殺・1878＝36歳：札幌本庁民事局副長に任ぜられる。綿羊飼育調査のためエドウィン＝ダンを伴って七重試験場へ出張。

沖縄県編入・1879＝37歳：病気療養のため、熱海温泉療養。東京出張所在勤となり、勸業課長。

・・・・・・1880＝38歳：監督不行届を理由に進退伺を黒田長官に提出するも、却下され、東京出張所勸業試験場長に任ぜられる。留学生仲間の五代友厚大阪商法会議所会頭からの書簡を受け、勸業試験場の払い下げ処分を公示。

明治14年政変1881＝39歳：周囲の反対を押し切って、突如、開拓使を辞職。慰労金200円下賜。直後に、黒田長官が北海道開拓使官有物払い下げを申請し、一大政治スキャンダルとなり、官有物払い下げ中止、国会開設の勸諭に至る。

新体詩抄・1882＝40歳：開拓使廃止に伴い、慰労金350円下賜。以後、音信不通となり、行脚放浪、

内閣発足・1885＝43歳：母が死去。

国民之友始・1887＝45歳：

帝国憲法発布1889＝47歳：

大本教・1892＝50歳：突然、東京に姿を現し、弟の家から家系図を持ち出し、

郡司千島探検1893＝51歳：神戸市暮合村で行路病人として救護を受け、まもなく没した。

{神戸又新日報}に行旅死亡の広告掲載され、新聞(日本)の雑報欄に「英士の末路」掲載。投稿欄に旧友からの弔文掲載。旧友の連名で葬儀開催の呼びかけ文各地に発信され、青山墓地にて黒田清隆ら参列のもと、葬儀がとりおこなわれた。